

上演 6

2023年7月31日 | 校目

四国 ブロック (香川県)

香川県立観音寺第一高等学校

「事情を知らない風間さんがぐいぐいくる」

第47回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第69回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

栃木県立栃木高等学校 (栃木県)

渡邊 滉太

夏海のためにサプライズで誕生日を祝おうとしている竹林と不知火。そこへ底抜けに元気で面白い転校生、風間さんがやってくる。タイトル通り、彼女は二人の事情も知らずにぐいぐいくる。しかし、風間さんに転校してくる前の話を振るとどこか浮かぬ表情を浮かべるのであった。

転校生は自分が知らない話に関して、とても疎外感を覚え、寂しくなるはずだ。そして、また転校しなければならぬと思うと、思い出が増えると辛くなる。これは、私たちにも言えることではないか。しかし、学校生活などではいずれ別れや終わりが訪れる。だからこそ苦難を乗り越えることができ、前に進んでいくことが可能であると考えた。

序盤から登場するひょっとこについて、「笑顔は幸せがよってくる」と言っていた風間さんがひょっとこを被る。これは思い出を増やしたくないからこそ周りをシャットダウンし自分を偽っていることを仮面を被っていると表しているのではないか。しかし、みんなと風車を作ったりする中で強い信頼が生まれてだからこそ自分の弱いところを見せようとする勇気が生まれた。信頼出来る関係になれたからこそ仮面を外せたのだ。

他にも風車(かざぐるま)が今回キーである。マスクをしていては吹いて回すことはできない。ラストシーンで色とりどりの風車が並んでいた中庭は、十人十色を表すと同時にアフターコロナの時代にマスクを外せるというメッセージも感じさせた。コロナ禍の学校生活はある意味、転校生と似ている。まるで、全員が転校生みたいなものだ。コロナ禍で行事での思い出はできず、校歌も歌う機会を失い、クラスメイトの名前も顔もちゃんと覚えていないことに気づいた。

私たちは何も知らないからこそ、お互いゼロからスタートしていけるはずだ。この作品は、コロナ禍だからこそ理解し合えることができると教えてくれるものであった。

